

化鳥

泉鏡花

青空文庫

愉快おもしろいな、愉快おもしろいな、お天氣が悪くつて外へ出て遊べなくつても可いや、笠かさを着て、
 蓑みのを着て、雨の降るなかをびしよびしよ濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪いのししだ。

菅笠すががさを目深まぶかに被かぶつて、※に濡れまいと思つて 向むかい風かぜに俯うつむ向むかいてるから顔も見えない、
 着ている蓑の裙すそが引摺ひきずつて長いから、脚も見えないで歩行あるいて行く、脊の高さは五尺ばかり
 ありあろうかな、猪、としては大おおなものよ、大方猪お中の王様おがあんな三角形ななりの冠かぶを被かて、
 市まちへ出て来て、そして、私の母おつかさん様の橋の上を通るのであろう。

トこう思つて見ていると愉快おもしろい、愉快おもしろい、愉快おもしろい。

寒い日の朝、雨の降つてる時、私の小さな時分、何日いつかでしたつけ、窓から顔を出して見
 ていました。

「母おつかさん様、愉快おもしろいものが歩行あるいて行くよ。」

その時母様は私の手袋こしらを拵こしらえていて下すつて、

「そうかい、何が通りました。」

「あのウ猪。」

「そう。」と喋って笑っていらつしやる。

「ありや猪だねえ、猪の王様だねえ。」

母様。だつて、大いんだもの、そして三角形の冠を被ていました。そうだけれども、

王様だけれども、雨が降るからねえ、びしよぬれになって、可哀相だったよ。」

母様は顔をあげて、こつちをお向きで、

「吹込みますから、お前もこつちへおいで、そんなにしていると、衣服が濡れますよ。」

「戸を閉めよう、母様、ね、ここん処の。」

「いいえ、そうしてあげておかないと、お客様が通つても橋銭を置いて行つてくれません。ずるいからね、引籠つて誰も見ていないと、そそくさ通抜けてしまいますもの。」

私はその時分は何にも知らないでいたけれども、母様と二人ぐらひは、この橋銭で立って行つたので、一人前いくらかずつ取つて渡しました。

橋のあつたのは、市を少し離れた処で、堤防に松の木が並んで植つていて、橋の袂に榎が一本、時雨榎とかいふのであつた。

この榎の下に、箱のような、小さな、番小屋を建てて、そこに母様と二人で住んでいた

ので、橋は粗造な、まるで、間に合せといったような拵え方、杭の上へ板を渡して竹を欄干にしたばかりのもので、それでも五人や十人ぐらい一時に渡ったからツて、少し揺れはしようけれど、折れて落ちるような憂慮はないのであつた。

ちようど市の場末に住んでる日傭取、土方、人足、それから、三味線を弾いたり、太鼓を鳴して飴を売ったりする者、越後獅子やら、猿廻やら、附木を売る者だの、唄を謡うものだの、元結よりだの、早附木の箱を内職にするものなんぞが、目貫の市へ出て行く往歸りには、是非母様の橋を通らなければならぬので、百人と二百人ずつ朝晩賑かな人通りがある。

それからまた向うから渡つて来て、この橋を越して場末の穢い町を通り過ぎると、野原へ出る。そこん処は梅林で、上の山が桜の名所で、その下に桃谷というのがあつて、谷間の小流には、菖蒲、燕子花が一杯咲く。頬白、山雀、雲雀などが、ばらばらになつて唄っているから、綺麗な着物を着た間屋の女だの、金満家の隠居だの、瓢を腰へ提げたり、花の枝をかついだりして千鳥足で通るのがある。それは春のことで。夏になると納涼だといって人が出る。秋は葦狩に出懸けて来る、遊山をするのが、皆内の橋を通らねばならない。

この間も誰かと二三人づれで、学校のお師匠さんが、内の前を通って、私の顔を見たから、丁寧にお辞儀をすると、おや、といったきりで、橋銭を置かないで行ってしまった。

「ねえ、母様、先生もずるい人なんかねえ。」

と窓から顔を引込ませた。

二

「お心こころ易立やすだてなんでしよう、でもずるいんだよ。よつぽどそういおうかと思っただけ、

先生だというから、また、そんなことで悪く取って、お前が憎まれでもしちやなるまいと思つて、黙っていました。」

といいいい母おつかさん様は縫つていらつしやる。

お膝の上に落ちていた、一ツの方の手袋の、恰好かっこうが出来たのを、私は手に取つて、掌てのひらにあててみたり、甲の上へ乗ツけてみたり、

「母おつかさん様、先生はね、それでなくつても僕のことを可愛がっちゃあ下さらないの。」
と訴えるようにいいました。

こういつた時に、学校で何だか知らないけれど、私がものをいっても、快く返事をおしでなかつたり、拗すねたような、けんどんなような、おもしろくない言ことばをおかけであるのを、いつでも情なさけないと思ひ思ひしていたのを考え出して、少し鬱ふさいで来て俯うつ向むいた。

「なぜさ。」

何、そういう様子に見えるのは、つい四五日前からで、その前さきにはちつともこんなことはありはしなかつた。歸かえつて母おつかさん様にそういつて、なぜだか聞いてみようと思つたんだ。けれど、番小屋へ入ると直すく飛と出して遊あそんであるいて、歸かえると、御飯ごはんを食くべて、そしちやあ横よこになつて、母様の氣高い美しい、頼たの母もしい、穩ゆ当たな、そして少し瘦やせておいでの、髪かみを束たねてしつとりしていらつしやる顔かほを見て、何か談話はなしをしいしい、ぱつちりと眼まなこをあいてるつもりなのが、いつか、そのまんまで寝ねてしまつて、眼まなこがさめると、また直すく支す度どを濟すまして、学校がくへ行ゆくんだもの。そんなこといつてる隙ひまがなかつたのが、雨あめで閉と籠こもつて、淋しみしいので思ひ出した、ついでだから聞いたので。

「なぜだつて、何なの、この間まねえ、先生せんせいが修身しんしんのお談話はなしをしてね、人は何だから、世よの中に一番いちばんえらいものだつて、そういつたの。母おつかさん様さま、違ちがつてるわねえ。」

「むむ。」

「ねツ違つてるワ、母様。」

と揉もみくちやにしたので、吃びつくり驚して、ぴったり手をついて畳の上で、手袋をのした。横よこに皺しわが寄つたから、引張ひっぱつて、

「だから僕、そういつたんだ、いいえ、あの、先生、そうではないの。人も、猫も、犬も、それから熊も、皆みんなおんなじ動物けだものだつて。」

「何とおっしゃつたね。」

「馬鹿なことをおっしゃいつて。」

「そうでしょう。それから、」

「それから、(だつて、犬や、猫が、口を利きますか、ものをいいますか)ツて、そういうの。いいます。雀すずめだつてチツチツチツチツて、母おつかさん様と、父おとっさん様と、兎こどもと朋達ともだちと皆みんなで、お談はなし話わをしてるじゃありませんか。僕眠い時、うっとりしてる時なんぞは、耳みみにとこ来て、チツチツチて、何かいつて聞かせますのツてそういうとね、(詰つまらない、そりやさえずるんです。ものをいうのじやあなくツて囀さえずるの、だから何をいうんだか分りますまい)ツて聞いたよ。僕ね、あのウだつてもね、先生、人だつて、大勢みんなで、皆みんなが体操場たいそうばで、てんでに何かいつてるのを遠くとこで聞きいてると、何をいつてるのかちつとも分らないで、

ざあざあツて流れてる川の音とおんなしで、僕分りませんもの。それから僕の内の橋の下を、あのウ舟漕いで行くのが何だか唄って行くけれど、何をいうんだかやっぱり鳥が声を大きくして長く引ばつて鳴いてるのと違いますもの。ずつと川下の方で、ほうほうツて呼んでるのは、あれは、あの、人なんか、犬なんか、分りませんもの。雀だつて、四十雀だつて、軒だの、榎だのに留つてないで、僕と一所に坐つて話したら皆分るんだけれど、離れてるから聞えませんの。だつて、ソツとそばへ行つて、僕、お談話しようと思つと、皆立つていつてしまいますもの、でも、いまに大人になると、遠くで居ても分りまますつて。小さい耳だから、沢山いろんな声が入らないのだつて、母様が僕、あかさんであつた時分からいいました。犬も猫も人間もおんなじだつて。ねえ、母様、だねえ母様、いまに皆分るんだね。」

三

母様はおつかさんは莞爾なすつて、

「ああ、それで何かい、先生が腹をお立ちのかい。」

そればかりではなかった、私の児心こどもこころにも、アレ先生が嫌な顔をしたな、トこう思つて取つたのは、まだモ少し種々いろんなことをいいあつてから、それから後の事で。

はじめは先生も笑いながら、ま、あなたがそう思っているのなら、しばらくそうしておきましょう。けれども人間には智慧ちえというものがあつて、これには他の鳥ほかだの、獣けだものだのといふ動物が企て及ばないといふことを、私が河岸に住まっているからつて、例をあげておさとしてあつた。

釣つりをする、網を打つ、鳥をさす、皆人みんなの智慧で、何も知らない、分らないから、つられて、刺されて、たべられてしまうのだトこういふことだった。そんなことは私聞かないで知つている、朝晩見ているもの。

橋を挟んで、川を遡さかのぼつたり、流れたりして、流網ながれあみをかけて魚うおを取るの、川ン中に手拱てあぐらかいて、ぶるぶるふるえて突立つたつてるうちは、顔のある人間だけれど、そらといつて水に潜ると、逆さかさになつて、水潜みずくぐりをしいしい五分間ばかりも泳いでいる、足ばかりが見える。その足の恰好かっこうの悪さといつたらない。うつくしい、金魚の泳いでる尾鱗おひれの姿や、ぴらぴらと水銀色を輝かして跳ねてあがる鮎あゆなんぞの立派さにはまるでくらべものになる

のじやあない。そうしてあんな、水みず浸びたしになつて、大川の中から足を出してる、こんな人間がありますものか。で、人間だと思つておかしいけれど、川の中から足が生えたのだと、そう思つて見ているとおもしろくツて、ちつとも嫌なことはないもので、つまらない観み世物せものを見に行くより、ずっとまし、なのだつて、母様がそうお謂いいだから、私はそう思つていますもの。

それから、釣をしますのは、ね、先生、とまたその時先生にそういいました。あれは人間じやあない、葦きなんぞ、御覽なさい。片手懐ふとこつて、ぬうと立つて、笠を被かぶつてる姿と、いうものは、堤防どての上に一本占治ぼんしめじ葦が生えたのに違ちがいませぬ。

夕方になつて、ひよろ長い影がさして、薄暗い鼠色の立姿にでもなると、ますます占治葦で、ずっと遠い遠い処まで一ならびに、十人も三十人も、小さいのだの、大きいのだの、短いのだの、長いのだの、一番橋手前かしろのを頭かしろにして、さかり時は毎日五六十本も出来るので、またあつちこつちに五六人ひとずつも一団ひとかたまりになつてゐるのは、千本しめじツて、くさくさに生えている、それは小さいのだ。木だの、草だのだと、風が吹くと動くんだけれど、葦だから、あの、葦だからゆつさりとしもませぬ。これが智慧があつて釣をする人間で、ちつとも動かない。その間に魚うおは皆みんなで悠々と泳いであるいていますわ。

また智慧があるつても、口を利かれないから鳥とくらべっこすりや、五分々々のがある、それは鳥さしで。

過いつかじゅう 日見たことがありました。

余所よそのおじさんの鳥さしが来て、私とこん処の橋の詰つめで、榎の下で立留まって、六本めの枝のさきに可愛い頬ほおしろ白しろが居たのを、棹さおでもってねらったから、あらあらツてそういつたら、叱しッ、黙もくつて、黙もくつて。恐こわい顔をして私を睨ねめたから、あとじさりをして、そツと見てみると、呼い吸きもしないで、じつとして、石のように黙もくつてしまつて、こすえみ据す身みになつて、中空を貫くくように、じりつと棹をのぼして、覗ねらつてるのに、頬白は何にも知らないで、チ、チ、チツチツてツて、おもしろそうに、何かいってしゃべっていました。それをとうとう突ついてさして取ると、棹のさきで、くるくると舞まつて、まだ烈はげしく声を出して鳴ないでるのに、智慧のある小父さんの鳥さしは、黙もくつて、鱸どじょう 掴つかみかみにして、腰の袋ねじ中へ捻ねじり込んで、それでもまだ黙もくつて、ものもいわないで、のっそり去いつちまつたことがあつたんで。

頼白は智慧ちえのある鳥さしにとられたけれど、囀さえずつてましたもの。ものをいってしまいましたもの。おじさんは黙だんまりで、傍そばに見ていた私までものを言うことが出来なかつたんだもの。何もくらべっこして、どっちがえらいとも分りはしないって。

何でもそんなことをいったんで、ほんとうに私そう思っていましたから。

でも、それを先生が怒おこつたのではなかつたらしい。

で、まだまだいろんなことをいって、人間が、鳥や獣けだものよりえらいものだとかさういっておさとしてあつたけれど、海うみ中なかだの、山奥やまおくだの、私の知らない、分らない処ところのことばかり譬たとえに引ひいていうんだから、口くちごたえ答こたえは出来なかつたけれど、ちつともなるほどと思われるようなことはなかつた。

だって、私、母おつかさん様のおつしやること、虚言うそだと思おもいませんもの。私の母おつかさん様がうそをいって聞きかせますものか。

先生は同一おなじ組ぐの小児こども達たちを三十人も四十人も一人で可愛あまがろうとするんだし、母おつかさん様は私一人可愛あまいんだから、どうして、先生のいうことは私わたしを欺だますんでも、母おつかさん様がいつてお聞きかせのは、決して違ちがつたことではない、トそう思おもつてるのに、先生のは、まるで母おつかさん様のと違ちが

ったこというんだから心服はされないじやありませんか。

私がうなず頷かないので、先生がまた、それでは、皆みんなあなたの思つてる通りにしておきましよう。けれども木だの、草だのよりも、人間が立ちまさ優つた、立派なものであるといふことは、いかな、あなたにでも分りましよう、まずそれを基礎きそにして、お談話はなしをしようからつて、聞きました。

分らない、私そうは思わなかつた。

「あのウおつかさん母様（だつて、先生、先生より花の方がうつくしゆうございます）ツてそう謂つたの。僕、ほんとうにそう思つたの、お庭にね、ちようど菊の花の咲いてるのが見えたら。」

先生は束髪に結つた、色の黒い、なりの低いがんじょう巖いし乗のりな、でくでくふと肥つた婦人おんなの方で、私がそういうと顔を赤うした。それから急にツツケンドンなものいいおしだから、大方それが腹をお立ちの原因であらうと思う。

「母様、それで怒つたの、そうなの。」

母様は合がってん点々をなすつて、

「おお、そんなことを坊や、お前いいましたか。そりやお道理だ。」

といつて笑顔をなすつたが、これは私の悪戯いたずらをして、母様のおつしやること肯きかない時、ちつとも叱らないで、恐い顔しないで、莞爾にっこり笑つてお見せの、それとかわらなかつた。

そうだ。先生の怒つたのはそれに違いない。

「だつて、虚言うそをいつちやありませんつて、そういつでも先生はいう癖になあ。ほんとうに僕、花の方がきれいだと思ふもの。ね、母様、あのお邸やしきの坊ちゃん、青だの、紫だの交まじつた、着物より、花の方がうつくしいつて、そういうのね。だもの、先生なんざ。」

「あれ、だつてもね、そんなこと人の前ではありません。お前と、母様のほかには、こんないいこと知つてるものはないのだから。分らない人にそんなこというと、怒られますよ。ただ、ねえ、そう思つていれば可いいだから、いつてはなりませんよ。可いいかい。そして先生が腹を立つてお憎みだつて、そういうけれど、何そんなことがありますものか。それは皆みんなお前がそう思うからで、あの、雀すずめだつて餌えを与やつて、拾ひろつてるのを見て、嬉うれしうだと思えば嬉うれしうだし、頬白ほくしろがおじさんにさされた時悲しい声と思つて見れば、ひいひいって鳴いたように聞えたじやないか。

それでも先生が恐い顔をしておいでなら、そんなものは見ていないで、今お前がいった、そのうつくしい菊の花を見ていたら可いでしょう。ね、そして何かい、学校のお庭に咲いてるのかい。」

「ああ沢山。」

「じゃあその菊を見ようと思って学校へおいで。花はね、ものをいわないから耳に聞えないでも、そのかわり眼にはうつくしいよ。」

モひとつ不平なのはお天氣の悪いことで、戸外には、なかなか雨がやみそうにもない。

五

また顔を出して窓から川を見た。さつきは雨脚あめあしが繁あはくつて、まるで、薄墨はくで刷はいたよう、堤防どてだの、石垣いしがきだの、蛇籠じやかごだの、中洲なかすに草の生えた処ところだのが、点ぼつちり々ぼつちり、あちらこちらに黒くろずんでいて、それで湿ぬつぽくつて、暗くかったから見えなかつたが、少し晴れて来たから、ものの濡ぬれたのが皆みんな見える。

遠くの方に堤防どての下の石垣の中ほどに、置物しやくのようになって、畏かしこまつて、猿さるが居る。

この猿は、誰が持主というのでもない。細引の麻縄で棒杭に結えつけてあるので、あの、湿地草が、腰弁当の握飯を半分与つたり、坊ちやんだの、乳母だのが、袂の菓子分けて与つたり、紅い着物を着ている、みいちやんの紅雀だの、青い羽織を着ている吉公の目白だの、それからお邸のかなりやの姫様なんぞが、皆で、からかいに行つては、花を持たせる、手拭を被せる、水鉄砲を浴せるといふ、好きな玩弄物にして、そのかわり何でもたべるものを分けてやるので、誰といつて、きまつて世話をする、飼主はないのだけれど、猿の餓えることはありはしなかつた。

時々悪戯をして、その紅雀の天窓の毛を撈つたり、かなりやを引掻いたりすることがあるの、あの猿松が居ては、うっかり可愛らしい小鳥を手放にして戸外へ出してはおけない、誰か見張つてでもない、危険だから、ちよいちよい縄を解いて放してやつたことが幾度もあつた。

放すが疾いか、猿は方々を駈ずり廻つて勝手放題な道楽をする。夜中に月が明い時、寺の門を叩いたこともあつたそうだし、人の庖厨へ忍び込んで、鍋の大きいのと飯櫃を大屋根へ持つて、あがつて、手で食べたこともあつたそうだし、ひらひらと青いなかから紅い切のこぼれている、うつくしい鳥の袂を引張つて、遥に見える山を指して気絶さした

こともあつたそうなり、私の覚えてからも一度誰かが、縄を切つてやつたことがあつた。その時はこの時雨榎しぐれえのきの枝の両股になつてゐる処に、仰向あおむけに寝転んでいて、鳥の脛あしを捕つかまえた。それから畜びくに入れてある、あのしめじ蕈たけが釣つつた、沙魚はぜをぶちまけて、散々さんざん悪巫山戯わるふざけをした挙句が、橋の詰つめの浮世床のおじさんに掴つかまつて、額の毛を真まっ四角しかくに鋏はさまれた、それで堪忍かんにんをして追放おっぱなしたんだそうなのに、夜が明けて見ると、また平時いづもの処に棒杭ぼうかにちやんと結むすべてあつた。蛇籠へびかごの上の、石垣いしゐの中ほどで、上の堤防どてには柳の切株きりくがある処。

またはじまつた、この通りに猿をつかまえてここへ縛むすつとくのは誰たれだろう誰たれだろうツて一ひとしきり騒さわいだのを私は知しっている。

で、この猿には出処しゅがある。

それは母おつかさん様が御存ごぞんじで、私にお話わしなすつた。

八九年前のこと、私がまだ母様のお腹なか中に小さくなつていた時分ときわなんで、正月、春のはじめのことであつた。

今はただ広い世の中に母様と、やがて、私のものといつたら、この番小屋と仮橋ほかの他ほかにはないが、その時分はこの橋ほどのものは、邸の庭の中の一ツの眺望ながめに過ぎないのであつたそうである。今、市まちの人が春、夏、秋、冬、遊山あそびに来る、桜山も、桃谷も、あの梅林も、菖あ

蒲の池も皆父様ので、頬白だの、目白だの、山雀だのが、この窓から堤防の岸や、柳の下や、蛇籠の上に居るのが見える、その身体の色ばかりがそれである、小鳥ではない、ほんとうの可愛らしい、うつくしいのがちようどこんな工合に朱塗の欄干のついた二階の窓から見えたそう。今日はまだお言いでないが、こういう雨の降って淋しい時などは、その時分のことをいつでもいつてお聞かせだ。

六

今ではそんな楽しい、うつくしい、花園がないかわり、前に橋銭を受取る筈の置いてある、この小さな窓から風がわりな猪だの、希代な蕈だの、不思議な猿だの、まだその他に人の顔をした鳥だの、獣だのが、いくらでも見えるから、ちつとは思出になるといっちやあ、アノ笑顔をおしなので、私もそう思つて見るせい、人があるいて行く時、片足をあげた処は一本脚の鳥のようでおもしろい。人の笑うのを見ると獣が大きな赤い口をあげたよと思つておもしろい。みいちゃんがものをいうと、おや小鳥が囁るかと思つておかしいのだ。で、何でも、おもしろくツて、おかしくツて、吹出さずには居られない。

だけれど今しがたも母様おつかさんがおいしいの通り、こないことを知ってるのは、母様と私ばかりで、どうして、みいちゃんだの、吉公だの、それから学校の女の先生なんぞに教えてたつて分るものか。

人に踏まれたり、蹴けられたり、後足で砂をかけられたり、苛いじめられて責さいまれて、煮湯にえゆを飲ませられて、砂あびを浴あびせられて、鞭むちうたれて、朝から晩まで泣通のどしで、咽喉のどがかれて、血を吐いて、消えてしまいそうになつてゐる処を、人に高見で見物されて、おもしろがられて、笑わわれて、慰なぐさみにされて、嬉うれしがられて、眼が血走つて、髪が動いて、唇が破れた処で、口く惜やしい、口惜やしい、口惜やしい、口惜やしい、蓄生けだものめ、獣けだものめと始終けだものそう思つて、五年も八年も経たたなければ、ほんとうに分ることはない、覚えられることではないんだそうで、お亡なくんなすつた、父おとっさん様さんとこの母様とが聞いても身み震ふるがするような、そういう酷ひどいめに、苦しい、痛い、苦しい、辛い、惨酷なめに逢つて、そうしてようようお分りになつたのを、すっかり私に教えて下すつたので、私はただ母ちゃん母ちゃんてツて母様の肩をつかまえたり、膝ひざにのつかつたり、針箱ひきだしの引ひ出だしを交まぜかえしたり、物さしをまわしてみたり、裁お縫ひの衣服きものを天窓あたまから被かぶつてみたり、叱なられて遁にげ出でしたりして、それでちゃんと教えて頂いて、それをば覚えて分つてから、何でも、鳥けだものだの、獣けだものだの、草けだものだの、木けだものだの、虫

だの、蕈だのに人が見えるのだから、こんなおもしろい、結構なことはない。しかし私に
 こういういいことを教えて下すつた母様は、とそう思う時は鬱ふさぎました。これはちつとも
 おもしろくなくつて悲しかった、勿体ない、とそう思った。

だつて母様がおろそかに聞いてはなりません。私がそれほどの思おもいをしてようようお前に
 教えらるるようになったんだから、うかつに聞いては罰があたります。人間も、鳥獸
 も草木も、昆虫類も、皆形みんなこそ変つていてもおんなじほどのものだということ。

とこうおっしゃるんだから。私はいつも手をつけて聞きました。

で、はじめの内はどうしても人が、鳥や、獸けだものとは思われないで、優しくされれば嬉しか
 った、叱られると恐かった、泣いてると可哀相あはれなだった、そしていろんなことを思った。そ
 のたびにそういつて母様にきいてみると何、皆鳥みんなが囀なげつてるんだの、犬が吠ほえるんだの、
 あの、猿が齒を剥むくんだの、木が身ぶるいをするんだのとちつとも違ったことはないつて、
 そうおっしゃるけれど、やっぱりそうばかりは思われないで、いじめられて泣いたり、撫な
 でられて嬉しかったりしいしいしたのを、その都度母様に教えられて、今じゃあモウ何と
 も思っていない。

そしてまだああ濡れては寒いだろう、冷たいだろうと、さきのように雨に濡れてびしょ

びしょ行くのを見ると気の毒だつたり、釣つりをしている人がおもしろそうだとそう思つたりなんぞしたのが、この節じやもう、ただ、変な輩だ、妙な猪だと、おかしいばかりである、おもしろいばかりである、つまらないばかりである、見ツともないばかりである、馬鹿々々しいばかりである、それからみいちやんのようなのは可愛らしいのである、吉公のようなのはうつくしいのである、けれどもそれは紅雀がうつくしいのと、目白が可愛らしいのとちつとも違いはせぬので、うつくしい、可愛らしい。うつくしい、可愛らしい。

七

また憎らしいのがある、腹立たしいのも他ほかにあるけれども、それも一場合あるに猿が憎らしかつたり、鳥が腹立たしかつたりするのとかわりは無いので。詮ずれば皆おかしいばかり、やっぱり噴飯材料ふきだすたねなんで、別に取留めたことがありはしなかつた。

で、つまり情を動かされて、悲かなしむ、愁うれうる、樂たのしむ、喜ぶなどいうことは、時に困り場合においての母おつかさん様ばかりなので。余所よそのものはどうであろうとちつとも心には懸けないように日ましにそうなつて来た。しかしこういう心になるまでには、私を教えるために、

毎日、毎晩、見る者、聞くものについて、母様がどんなに苦勞をなすって、丁寧に深切に、飽かないで、熱心に、懇ねんごろに嚙かんで含めるようになすったかも知れはしない。だもの、どうして学校の先生をはじめ、余所のものが少々ぐらいのことで、分るものか、誰だつて分りやしません。

ところが、母様と私とのほか知らないことを、モ一人他ほかに知ってるものがあるそうで、始終母様がいつてお聞かせの、それはあすこに置物のように畏かしこまっている、あの猿——あの猿もとの旧の飼主であつた——老父しじいさんの猿ざるまわし廻まわしだといいます。

さつき私がいつた、猿に出処があるというのはこのことで。

まだ私が母様のお腹なかに居た時分だつて、そういいましたつけ。

初卯はつちうの日、母様が腰元を二人連れて、市まちの卯辰うたつの方の天神様へお参んなすって、晩方帰つていらつしやつた。ちようど川向うの、いま猿の居る処で、堤防どての上のあの柳の切株に腰をかけて猿のひかえ綱を握つたなり、俯うつむ向いて、小さくなつて、肩で呼吸いきをしていたのがその猿廻のじいさんであつた。

大方今の紅雀のその姉さんだの、頬白のその兄さんだのであつたらうと思われる。男だの、女だの、七八人寄つて、たかつて、猿にからかつて、きやあきやあいわせて、わあわ

あ笑つて、手を拍つて、喝采して、おもしろがつて、おかしがつて、散々慰んで、それら菓子を作るワ、蜜柑を投げろ、餅をたべさすわつて、皆でどつきり猿に御馳走をして、暗くなるどやどやいつちまつたんだ。で、じいさんをいたわつてやったものは、ただの一人もなかつたといひます。

あわれだと思ひなすつて、母様がお錢を恵んで、肩掛を着せておやんなすつたら、じいさん涙を落して拜んで喜びましたつて、そうして、

（ああ、奥様、私は獣になりとうございます。あいら、皆畜生で、この猿めが夥間でござりましょう。それで、手前達の同類にものをくわせながら、人間一疋の私には目を懸けぬのでござります。）とそういつてあたりを睨んだ、恐らくこのじいさんなら分るであろう、いや、分るまでもない、人が獣であることをいわないでも知つていようと、そういつて、母様がお聞かせなすつた。

うまいこと知つてるな、じいさん。じいさんと母様と私と三人だ。その時じいさんがそのまんまで控綱をそこん処の棒杭に縛りツ放しにして猿をうつちやつて行こうとしたので、供の女中が口を出して、どうするつもりだつて聞いた。母様もまた傍からまあ棄児にしては可哀相でないかツて、お聞きなすつたら、じいさんにやにやと笑つたそうで、

(はい、いえ、大丈夫でござります。人間をこうやっと思ったら、餓えも凍えもしようけれど、獣でござりますから今に長い目で御覧じまし、此奴はもう決してひもじい目に逢うことはござりませぬから。)

とそういつて、かさねがさね恩を謝して、分れてどこへか行っちゃいましたッて。

果して猿は餓えないでいる。もう今ではよつぼどの年紀であろう。すりや、猿のじいさんだ。道理で、功を経た、ものの分つたような、そして生まじめで、けろりとした、妙な顔をしているんだ。見える見える、雨の中にちよこなんと坐っているのが手に取るように窓から見えるワ。

八

朝晩見馴れて珍しくもない猿だけれど、いまこんなこと考え出して、いろんなこと思つて見ると、また殊にもものなつかしい。あのおかしな顔早くいつて見たいなど、そう思つて、窓に手をついてのびあがつて、ずっと肩まで出すと※がかかつて、眼のふちがひやりとして、冷たい風が頬を撫でた。

その時仮橋ががたがたいって、川面の小糠雨を掬うように吹き乱すと、流が黒な
って颯と出た。といっしよに向岸から橋を渡つて来る、洋服を着た男がある。

橋板がまた、がったりがたりいって、次第に近づいて来る、鼠色の洋服で、釦をはず
して、胸を開けて、けばけばしゆう襟飾を出した、でつぷり紳士で、胸が小さくツて、
下腹の方が図ぬけにはずんでふくれた、脚の短い、靴の大きな、帽子の高い、顔の長
い、鼻の赤い、それは寒いからだ。そして大跨に、その逞い靴を片足ずつ、やりちがえ
にあげちやあ歩行いて来る。靴の裏の赤いのがぼつかり、ぼつかりと一ツずつこつちから
見えるけれど、自分じやあ、その爪さきも分りはしまい。何でもあんなに腹のふくれた人
は、臍から下、膝から上は見たことがないのだとそういいます。あら！ あら！ 短服
に靴を穿いたものが転がつて来るぜと、思つて、じつと見ていると、橋のまんなかあたり
へ来て鼻目金をはずした、※がかかつて曇つたと見える。

で、衣兜から手巾を出して、拭きにかかったが、蝙蝠傘を片手に持つていたから手
を空けようとして咽喉と肩のあいだへ柄を挟んで、うつむいて、珠を拭いかけた。

これは今までに幾度も私見たことのある人で、何でも小児の時は物見高いから、そら、
婆さんが転んだ、花が咲いた、といつて五六人だかりのすることが眼の及ぶ処にあれば、

必ず立つて見るが、どこに因らず、場所は限らない。すべて五十人以上の人が集会したな
かには必ずこの紳士の立交たちまじつていないということはなかった。

見る時にいつも傍はたの人の誰かしらつかまえて、尻上りの、すました調子で、何かものを
いつていかなかったことはほとんど無い。それに人から聞いていたことはかつてないので、
いつでも自分で聞かせている。が、聞くものがなければ独ひとりで、むむ、ふむ、といったよう
な、承知したようなことを独ひとりごと言ことのようではなく、聞かせるようにいつてる人で。母様も
御存じで、あれは博士ぶりというのであるとおっしゃった。

けれども鰻ぶりではたしかにない、あの腹のふくれた様子といたら、まるで、鰻あんこうに肖に
ているので、私は蔭じやあ鰻あんこう博士とそういいますワ。この間も学校へ参観に来たことが
ある。その時も今被かむつている、高い帽子を持っていたが、何だつてまたあんな度はずれの
帽子を着たがるんだろう。

だって、目金を拭こうとして、蝙蝠傘を頤おとがで押おえて、うつむいたと思うと、ほら、ほら、
帽子が傾かたむいて、重量おもみで沈み出して、見てるうちにすつぽり、赤い鼻の上へ被かぶさるんだもの。
目金はずした上へ帽子がかぶさつて、眼が見えなくなつたんだから驚いた、顔中帽子、
ただ口ばかりが、その口を赤くあけて、あわてて、顔をふりあげて帽子を揺りあげようと

したから蝙蝠傘がぼつたり落ちた。落こちると勢よく三ツばかりくるくと舞つた間に、鮫鱈博士は五ツばかりおまわりをして、手をのぼすと、ひよいと横なぐれに風を受けて、斜めに飛んで、遙か川下の方へ憎らしく落着いた風でゆつたりしてふわりと落ちると、たちまち矢のごとくに流れ出した。

博士は片手で目金を持って、片手を帽子にかけたまま、烈しく、急に、ほとんど数える隙がないほど靴のうらで虚空を踏んだ、橋ががたがたと動いて鳴った。

「母様、母様、母様。」

と私は足ぶみした。

「あい。」としずかに、おいしいなすつたのが背後に聞える。

窓から見たまま振向きもしないで、急込んで、

「あらあら流れるよ。」

「鳥かい、獣かい。」と極めて平気でいらつしやる。

「蝙蝠なの、傘なの、あら、もう見えなくなつたい、ほら、ね、流れツちまいました。」

「蝙蝠ですと。」

「ああ、落ツことしたの、可哀相に。」

と思わず歎息をして呟いた。

母様は笑を含んだお声でもって、

「廉や、それはね、雨が晴れるしらせなんだよ。」

この時猿が動いた。

九

一廻くるりと環にまわって、前足をついて、棒杭の上へ乗って、お天気を見るのであろう、仰向いて空を見た。晴れるといまに行くよ。

母様は嘘をおっしゃらない。

博士は頻に指ししていたが、口が利けないらしかった。で、一散に駈けて来て、黙って小屋の前を通ろうとする。

「おじさんおじさん。」

と厳しく呼んでやった。追懸けて、

「橋銭を置いていらつしやい、おじさん。」

とそういつた。

「何だ！」

ひととおり

一通の声ではない。さつきから口が利けないで、あのふくれた腹に一杯固くなるほど詰め込み詰め込みしておいた声を、紙鉄砲ぶつようにはじきだしたものらしい。

で、赤い鼻をうつむけて、額越ひたいごしに睨にらみつけた。

「何か。」と今度は鷹揚おうようである。

私は返事をしませんかった。それは驚いたわけではない、恐こわかったわけではない。鰻うなぎにしては少し顔がそぐわれないから何にしよう、何に肖にているだろう、この赤い鼻の高いのに、さきの方が少し垂れさがつて、上唇におつかぶさつてる工合といたらない、魚うおより獣よりむしろ鳥の嘴はしによく肖にている。雀か、山雀やまがらか、それでもない。それでもないト考くえて七面鳥に思いあつた時、なまぬるい音調で、

「馬鹿め。」

といいすてにして、沈んで来る帽子をゆりあげて行ゆこうとする。

「あなた。」とおつかさんが屹きつとした声でおっしゃって、お膝の上の糸屑くずを、細い、白い、指のさきで二ツ三ツはじき落して、すつと出て窓の処へお立ちなすつた。

「渡をお置きなさらんではいけません。」

「え、え、え。」

といったがじれつたそうに、

「俺は何じやが、うう、知らんのか。」

「誰です、あなたは。」と冷か^{ひや}で、私^{わたし}こんなのを聞く^きとすつきりする。眼のさきに見える気^きにくわ^くないものに、水^{みづ}をぶっかけて、天窓^{あたま}から洗^{せん}つておやんなさるので、いつでもこうだ、極めていい。

鮫鱈^{さく}は腹^{はら}をぶくぶくさして、肩^{かた}をゆすつたが、衣兜^{かぶ}から名刺^{めいし}を出^だして、笊^{ざる}のなかへまっすぐに恭^{うやうや}しく置いて、

「こういうものじや、これじや、俺じや。」

と^いって肩書^{かたがき}の処^{ところ}を指^{ゆび}した、恐^{おそ}しくみじかい指^{ゆび}で、黄金^{きん}の指環^{ゆびわ}の太^{ふと}いのはめて^いる。手^てにも取^とらないで、口^{くち}のなかに低声^{こゝえ}におよみなすつたのが、市内衛生会委員^{しち内衛生会委員}、教育談話^{きよくだんわ}会幹事^{かいかんじ}、生命保険会社社員^{せいめいほけんがいしゃ社員}、一六会会長^{いちろくかい会長}、美術奨励会理事^{びじゆしょうれいかいり}、大野喜太郎^{おののきたろう}。

「この方ですか。」

「うう。」といった時^{とき}ふつくりした鼻^{はな}のさきがふらふらして、手^てで、胸^{むね}にかけた何^{なに}だか徽^き

章しょうをはじめたあとで、

「分わつたかね。」

「こんどはやさしい声でそういつたまままた行きゆそうにする。

「いけません。お払はらいでなきやアあとへお帰かえんなさい。」とおっしゃった。

先生せんせい妙な顔かほをしてぼんやり立たつてたが少しむきになって、

「ええ、ここ、細こまいのがないんじやから。」

「おつりを差さ上げましょう。」

おつかさんは帯おびのあいだへ手てをお入れ遊あそばした。

十

母おつか様さん

はうそをおつしやらない。博士はくしが橋はし銭せんをおいて遁にげて行ゆくと、しばらくして雨

が晴はれた。橋はしも蛇籠へびかごも皆雨みなあめにぬれて、黒くろくなつて、あかるい日中ひなかへ出でた。榎えのの枝えだからは時

々々はらはらと雫しずくが落おちる。中流ちゅうりゅうへ太陽たいやうがさして、みつめてみるとまばゆいばかり。

「母様遊おつかさんあそびに行いこうや。」

この時鉢はさみをお取んなすって、

「ああ。」

「ねえ、出かけたつて可いいの、晴れたんだもの。」

「可いけれど、廉や、お前またあんまりお猿さるにからかつてはなりませんよ。そう可い塩あんば梅いにうつくしい羽はの生なえた姉あねさんがいつでもいるんじやありません。また落おつこちよ
うもんなら。」

ちよいと見向まいて、清すずしい眼まなこで御覽ごらんなすつて、莞爾にっこりしてお俯向うつむきで、せつせと縫ぬつてい
らつしやる。

そう、そう！ そうだった。ほら、あの、いま頬ほつぺたを搔かいて、むくむく濡ぬれた毛けか
らいきりをたてて日向ひなたぼっこをしている、憎にくらしいツたらない。

いまじやあもう半年ごうちくも経たつたろう。暑とさの取とつきの晩方ばんぱ頃ころで、いつものように遊あびに行
つて、人あたまが天窓あたまを撫なでてやつたものを、業畜ごうちく、悪巫山戯わるかざげをして、キツキツと齒むを剥むいて、
引搔ひつかきそんな劍幕けんまくをするから、吃驚びつくりして飛退とびのこうとすると、前足まへあしでつかまえた、放はなさな
いから力ちからを入れて引張ひっぱり合あつた奮はみであつた。左ひだりの袂たもとがびりびりと裂ちぎけて断ちぎれて取とれた、
はずみをくつて、踏占ふみしめた足あしがちようど雨上あめありだつたから、堪たまりはしない。石いしの上うへへすべつ

て、ずるずると川へ落ちた。わつといつた顔へひとなみ波かぶつて、呼吸をひいて仰向けに沈んだから、面くらつて立とうとすると、また倒れて、眼がくらんで、アツとまたいきをひいて、苦しいので手をもがいて身体からだを動かすただどぶんどぶんと沈んで行く。情なさけないと思つたら、内に母様の坐つていらつしやる姿が見えたので、また勢いきおいついたらけれど、やつぱりどぶんどぶんと沈むから、どうするのかなと落着いて考えたように思う。それから何のことだろうと考えたようにも思われる。今に眼が覚めるのであらうと思つたようでもある、何だかぼんやりしたが俄にわかに水ん中だと思つて叫ぼうとすると水をのんだ。もう駄目だ。

もういかんとあきらめるトタンに胸が痛かつた、それから悠々と水を吸つた、するとうつとりして何だか分らなくなつたと思うと、※と糸いとのような真赤まっかな光線まつかがさして、一ひと幅はばあかるくなつたなかにこの身体からだが包まれたので、ほつといきをつくつと、山の端はが遠く見え、私のからだは地つちを放れて、その頂より上の処ところに冷いものに抱えられていたようで、大きなうつくしい目が、濡髪をかぶつて私の頬ほん処へくつついたから、ただ縋すがり着いてじつとして眼を眠つた覚おぼえがある。夢ではない。

やつぱり片袖なかつたもの。そして川へ落おちて溺れそうだったのを救われたんだって、母様のお膝ひざに抱かれていて、その晩聞いたんだもの。

だから夢ではない。

一体助けてくれたのは誰ですって、母様に問うた。私がものを聞いて、返事に躊躇（ちゆうちよ）をなすつたのはこの時ばかりで、また、それは猪だとか、狼だとか、狐だとか、頬白だとか、山雀だとか、鮫鰈（さぼ）だとか、鯖（さば）だとか、蛆（うじ）だとか、毛虫だとか、草だとか、竹だとか、松茸（まつたけ）だとか、湿地茸（しめじ）だとかおいしいでなかったのもこの時ばかりで、そして顔の色をおかえなすつたのもこの時ばかりで、それに小さな声でおっしゃつたのもこの時ばかりだ。

そして母様はこうおいであつた。

（廉や、それはね、大きな五色（ごしき）の翼（はね）があつて天上に遊んでいるうつくしい姉さんだよ。）

十一

（鳥なの、母（おつかさん）様。）とそういつてその時私が聴いた。

これにも母様は少し口籠（くちごも）つておいであつたが、

（鳥じゃあないよ、翼（はね）の生えた美しい姉さんだよ。）

どうしても分らんかった。うるさくいったら、しまいにや、お前には分らない、とそう
 おいであつたのを、また推返おしかえして聴いたら、やっぱり、

(翼はねの生えたうつくしい姉さんだつてば。)

それで仕方がないからきくのはよして、見ようと思った。そのうつくしい翼のはえたも
 の見たくなつて、どこに居ますくつて、セツついても、知らない、そういつてばかり
 おいでであつたが、毎日々々あまりしつこかつたもんだから、とうとう余儀なさそうなお
 顔色かおつきで、

(鳥屋の前にもいつて見て来るが可い。)

そんならわけはない。

小屋を出て二町ばかり行くと、直ぐ坂があつて、坂の下口おりぐちに一軒鳥屋があるので、樹こ
 蔭かげも何にもない、お天気の良い時あかるいあかるい小さな店で、町家まちやの軒ならびにあつた。
 鸚鵡おうむなんざ、くるツとした、露のたりそうな、小さな眼で、あれで瞳が動きますよ。毎日
 々々行つちやあ立つていたので、しまいにやあ見知顔で私の顔を見て頷うなずくようでしたつけ、
 でもそれじゃあない。

駒鳥こまはね、丈の高い、籠かごん中を下から上へ飛んで、すがつて、ひよいと逆さかさに腹を見せて

熟柿じゆくしの落おつこちるようにぼたりとおりて、餌えをつついて、私をばかまいつけない、ちつとも気に懸かけてくれようとはしなかった、それでもない。皆みんな違ちがつてる。翼はねの生なえたうつくしい姉あねさんは居いないのツて、一所いしょに立たつた人をつかまえちやあ、聞きいたけれど、笑あはうものやだといふものやら、番小屋ばんこの媽か々かに似にて此こ奴いつもどうかしていらあ、といふものやら。皆みんな獸けものだ。

(翼はねの生なえたうつくしい姉あねさんは居いないの。)ツて聞きいた時とき、莞にっこり爾り笑あはつて両方りょうほうから左右さゆうの手てでおうように私わたしの天窓あたまを撫なでて行いつた、それは一様いっやうに緋羅紗ひらしやのずぼんを穿はいた二人ふたりの騎兵きへいで——聞きいた時とき——莞にっこり爾り笑あはつて、両方りょうほうから左右さゆうの手てで、おうように私わたしの天窓あたまをなで、そして手てを引ひあつて黙ひそつて坂さかをのぼつて行いつた。長靴ながぐつの音ねがぼっくりして、銀ぎんの劍けんの長ながいのがまっすぐに二ツならんで輝かがやいて見みえた。そればかりで、あとは皆みんな馬鹿ばかにした。

五日ごにちばかり学校がっこうから帰かえつちやあその足あしで鳥屋とりやの店みせへ行いつて、じつと立たつて、奥おくの方ほうの暗くらい棚たなの中で、コトコトと音ねをさしているその鳥とりまで見み覚さえたけれど、翼はねの生なえた姉あねさんは居いないので、ぼんやりして、ぼつとして、ほんとうに少し馬鹿ばかになつたような気がしいしい、日ひが暮くれると帰かえり帰かえりました。で、とても鳥屋とりやには居いないものとあきらめたが、どうし

でも見たくツてならないので、また母様にねだつて聞いた。どこに居るの、翼の生ええうつくしい人はどこに居るのツて。何とおいいでも肯分ききわけないものだから母様が、
(それでは林へでも、裏の田圃たんぼへでも行つて、見ておいで。なぜツて、天上に遊んでいるんだから、籠の中に居ないのかも知れないよ。)

それから私、あの、梅林のある処に参りました。

あの桜山と、桃谷と、菖蒲あやめの池とある処で。

しかし、それはただ青葉ばかりで、菖蒲の短いのがむらがつて、水の色いろの黒い時分、ここへも二日、三日続けて行ゆきましたつけ、小鳥は見つからなかつた。鳥が沢山たん居た。あれが、かあかあ鳴いて一しきりして静まるとその姿の見えなくなるのは、大方その翼はねで、日の光をかくしてしまうのでしよう。大きな翼はねだ、まことに大い翼おおきつばさだ、けれどもそれではない。

十二

日が暮れかかると、あつちに一ならび、こつちに一ならび、横縦になつて、梅の樹が飛と

びとびと々に暗くなる。枝々のなかの水田みずたの水がどんよりして淀よどんでいるのに際立って真白まっしろに見えるのは鷺さぎだった、二羽一ところに、ト三羽一ところに、ト居て、そして一羽が六尺ばかり空へ斜ななめに足から糸のように水を引いて立つてあがったが音がなかった、それでもない。蛙かわずが一斉に鳴きはじめる。森が暗くなって、山が見えなくなった。

宵月よいつきの頃だったのに、曇つてたので、星も見えないで、陰々として一面にももの色が灰のようにうるんでいた、蛙がしきりになく。

仰いで高い処に、朱の欄干のついた窓があつて、そこが母おつかさん様のうちだったと聞く。仰いで高い処に、朱の欄干のついた窓があつて、そこから顔を出す、その顔が自分の顔であつたんだらうにトそう思いながら破れた垣の穴ん処ところに腰をかけてぼんやりしていた。

いつでもあの翼はねの生えたうつくしい人をたずねあぐむ、その昼のうち精神の疲労つかれないうちは可いいんだけれど、度が過ぎて、そんなに晩おそくなると、いつも、こう滅めい入いつてしまつて、何だか、人に離れたような、世間に遠ざかつたような気がするので、心細くもあり、うら悲しくもあり、覚おぼつか束つかないようでもあり、恐おそしいようでもある。嫌な心持だ、嫌な心持だ。早く帰ろうとしたけれど、気が重くなつて、その癖神経は鋭くなつて、それでいてひとりでにあくびが出た。あれ！

赤い口をあいたんだなど、自分でそうおもつて、吃驚した。

ぼんやりした梅の枝が手をのぼして立つてゐるようだ。あたりを、すと真暗で、遠くの方で、ほう、ほうツて、呼ぶのは何だろう。冴えた通る声で野末を押しひろげるように、鳴く、トントントントンと、餌にあたるような響きが遠くから来るように聞える鳥の声は、梟であつた。

一ツでない。

二ツも三ツも。私に何を談すのだろう、私に何を話すのだろう。鳥がものをいうと慄然として身の毛が弥立つた。

ほんとうにその晩ほど恐かつたことはない。

蛙の音がますます高くなる、これはまた仰山な、何百、どうして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼があつて、口があつて、足があつて、身体があつて、水の中に居て、そして声を出すのだ。一ツ一ツ、トわなないた。寒くなつた。風が少し出て、樹がゆつさり動いた。

蛙の音がますます高くなる。居ても立つても居られなくツて、そつと動き出した。身体がどうになつてゐるようで、すつと立ち切れないで踞つた、裾が足にくるまつて、帯が少

し弛ゆるんで、胸があいて、うつむいたまま天窓あたまがすわった。ものがぼんやり見える。

見えるのは眼だトまたふるえた。

ふるえながら、そつと、大事に、内証で、手首をすくめて、自分の身体からだを見ようと思つて、左右へ袖をひらいた時、もう、思わずキャツと叫んだ。だって私が鳥のように見えただけのもの。どんなに恐かつたらう。

この時、背後うしろから母おつかさん様がしつかり抱いて下さらなかつたら、私どうしたんだか知れません。それはおそくなつたから見に来て下すつたんで、泣くことさえ出来なかつたのが、「母おつかさん様！」といつて離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり襟とこん処へかじりついて仰向あおむいてお顔を見た時、フツト気が着いた。

どうもそうらしい、翼はねの生えたくつくしい人はどうも母様であるらしい。もう鳥屋には、行くまい。わけてもこの恐しい処へと、その後のちふつり。

しかしどうしてもどう見ても、母様にうつくしい五色ごしきの翼はねが生えちやあいないから、またそうではなく、他ほかにそんな人が居るのかも知れない、どうしても判然はつきりしないで疑われる。

雨も晴れたり、ちようど石原もすべ迂るだらう。母様はああおっしやるけれど、わざとあの

猿にぶつかって、また川へ落ちてみようかしら。そうすりやまた引上げて下さるだろう。見たいな！ 羽の生えたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可い。母様がいらつしやるから、母様がいらつしやったから。

明治三十（一八九七）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月25日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：カエ

2003年8月30日作成

2005年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

化鳥

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>